

[様式11]

(対象事業：平成17年度文化庁芸術拠点形成事業)

**事業名：「まるびい アートスクール・プログラム」(美術館教育・総合学習プログラム構築事業)**

**事業者名：財団法人金沢芸術創造財団 金沢21世紀美術館**

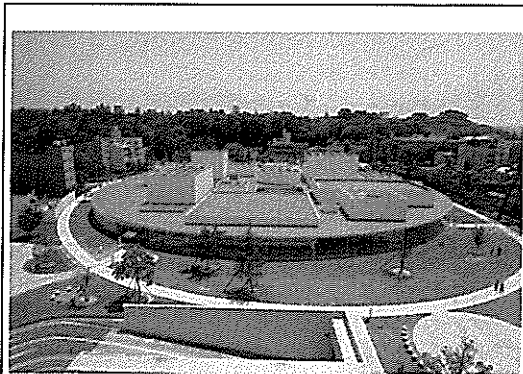
**連携事業館名：金沢市立長田町小学校、金沢市立犀川小学校**

**住所：**石川県金沢市広坂1-2-1

**TEL：**076-220-2800

**FAX：**076-220-2802

**HPアドレス：**[www.kanazawa21.jp](http://www.kanazawa21.jp)



### ①施設概要

金沢21世紀美術館は、「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目的に、平成16年10月9日にオープンした。ミュージアムとまちとの共生により、新しい金沢の魅力と活力を創出していく。

### ②事業の意図目的

美術館の教室化／地域—美術館の連携強化

○平成16年度の芸術拠点形成事業「ミュージアムクルーズ」実施により培われた学校と美術館間の連携活動を継承、美術館利用プログラムの開発・蓄積を学校＋美術館の共同で行い、学校による美術館利用の促進及び美術館の教室化を図る。

○学校と美術館が相互協力のもと、美術館に蓄積する情報やノウハウ、人的資源やアーティストの活用、学校における造形活動と美術館における展示鑑賞活動の融合を図るとともに、体験学習に必要な学習教材やプログラムをアーティスト・教員・学芸員が共同で開発し、美術館機能を活用した新しい総合学習プログラムの構築を目指す。

○この事業によって、美術館と学校とがその連携をさらに強め、地域住民の文化活動への理解が深化し、美術館が芸術文化の創造、及び継承のための拠点としてより身近な存在となることを目的とする。

### ③事業概要

美術、音楽、科学、映像、パフォーマンスなど、美術と他の分野にまたがる複数のテーマ／プログラムを準備し、その中から、小学校低・中・高学年及び中学生・高校生やクラブ活動など、異なる対象それぞれの要望に基づいた教材開発プログラムを学校が選択・実施した。事業自体はおおむね以下のプロセスで行われた。

●アーティストを招聘し、学校での出前授業、美術館での作品制作・展示と展示作品の鑑賞会・ワークショップを開催。展示は一般にも公開。

●同アーティストとの共同作業によるプログラムや教材の開発。

●開発されたプログラム・教材を普及するためのビデオ映像(DVD)の制作と配布。

平成17年度は2プログラムの開発・実施を行う。開発されたプログラム及び教材は他校の活動や一般教育関係者に周知し、各学校の事情に応じて応用活用できる教育素材として貸し出し等に継続的に対応し、普及に供する。

## 《プログラム内容：テーマ及びアーティスト》

### 1. 「音のかけら ワークショップ」アーティスト：金沢健一

→音具としての鉄製の彫刻を制作、作品を用いて、素材とたわむれ、音と振動を体感するワークショップを実施。今後、制作した教材を継続的に活用し、教科、学年、学校の境界を超えて、プログラムを展開する普及活動を行ってゆく。

●「音のかけら」は、鉄を素材とする造形作家である金沢健一の一連の代表作品群のタイトルである。多様な形に溶断された鉄の一片一片に触れることによってその場に偶然に生まれるリズムやハーモニー、他者との出会いを誘発する作品である。本プロジェクトで金沢市立長田町小学生たちは、まず金沢健一の大型作品によるパフォーマンスを鑑賞することによって素材の感触から鉄のかけらが秘める無限の可能性を体感する。その後、金沢氏の作品に実際に触れながら、音を生み出す体験に主眼をおいたワークショップを行う。その後、4～5人のグループにわかれて円形の鉄板にチョークで自由に線を引き、切り分けるラインを共同で描く。溶断の現場を実見し、一部体験も経て、バリをとり、磨いて完成した作品は、鉄の造形作品であると同時に音具でもある。身近にあるさまざまなモノが鉄と触れ合っただのような音をたてるのかという関心を喚起されながら、生徒達は自分たち自身で制作した『音のかけら』からさまざまな音色を発見した。また同時に、それは自分以外の他の人々との共鳴や共感をも生み出す体験へと発展した。

### 2. 「ペイント・マイ・ルーム」アーティスト：西山美なコ

→作家と生徒との対話／交流により生徒による「あこがれの部屋」と題した作品を制作。西山美なコの作品と生徒作品による美術館の教室化の実践。

●「ペイント・マイ・ルーム」は、西山美なコの代表作である《ザ・ピンクはうす》を中心に展開し、小学校生徒による「あこがれの部屋」と題する作品と西山作品の世界が交流したプロジェクトである。西山は、金沢市立犀川小学校において自身の制作活動についてトークを行い、トーク終了後、それぞれの生徒が、自身の「あこがれの部屋」と題して制作した作品を発表し、両者は対話交流を行った。このトークが開催された後、生徒は、グループに分かれ、更にサイズの大きい「あこがれの部屋」を制作した。西山美なコによる《ザ・ピンクはうす》が3月21日（火・祝）より当館で公開され、犀川小学校の生徒は3月23日（木）に来館し、当館学芸員と共に見学した。また、当館学芸員が犀川小学校において、生徒の作品を見学し、交流を行った。更に、一連のプロジェクトの記録は、映像化され、当館のフリーゾーンで放映されている。

## ④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物    テキスト    ワークシート    その他（メッセージビデオ、記録映像作品）  
作成した報告書等

ビデオ（「ペイント・マイ・ルーム」、「音のかけら」）

冊子（ワークシート、報告書）

その他（《音のかけら》12点）

## ⑤参加者状況

参加者人数    延べ    112    人

内    訳    金沢市立長田町小学校48人、金沢市立犀川小学校64名

\*実施期間中（2月16日～3月31日、来館者数、一日平均    約    人）

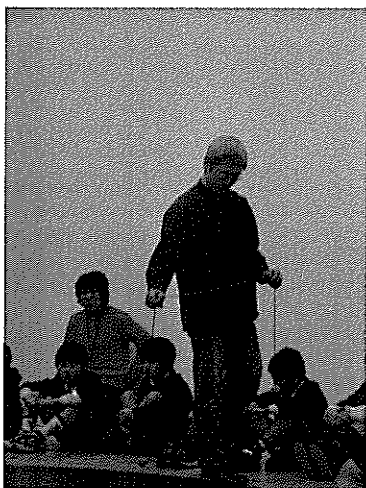
## 1. 「音のかげら」ワークショップ

### (1) 事業の実施状況について

平成 18 年 2 月 16 日～平成 18 年 3 月 31 日の間、作家の金沢健一氏と金沢市長田町小学校 4 年生 48 名の交流を中心に「音のかげら」ワークショップを実施した。このワークショップは、下記のとおり、大きく 4 つに分けられる。

#### ① 出会い：平成 18 年 2 月 17 日 9：20-10：10「金沢健一氏パフォーマンス」（長期インсталレーション・ルーム）

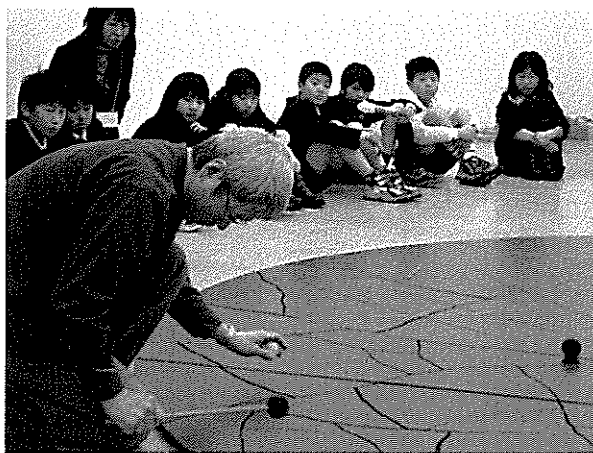
長田町小学校 4 年生児童 48 人が、美術館に来館し、アーティスト金沢健一による自作の『音のかげら N4』による即興パフォーマンスを鑑賞することによって、作家と作品（造形、空間、音、振動等）との出会いを体感した。緊張感あふれるパフォーマンスの時間のなかで、素手、木球、ピンポン球、マレット、木槌、ピアノ線、鎖など、鉄片に触れるものの物性や触れ方に応じて、ひとつひとつ形の異なる鉄の「かげら」から立ち上がる千差万別の音色や響きに熱心に聴き入る様子が見られた。十分に音の空間と時間に親しんだのち、金沢氏主導で、児童ひとりひとりがマレットを手にして実際に作品に触れ、音をたてるワークショップを行った。自分なりの音の発見とともに、他者の音との調和や共鳴ということへの気づきが起こり、個の表現から共同表現へ自発的に移行する場面が多々見られた。



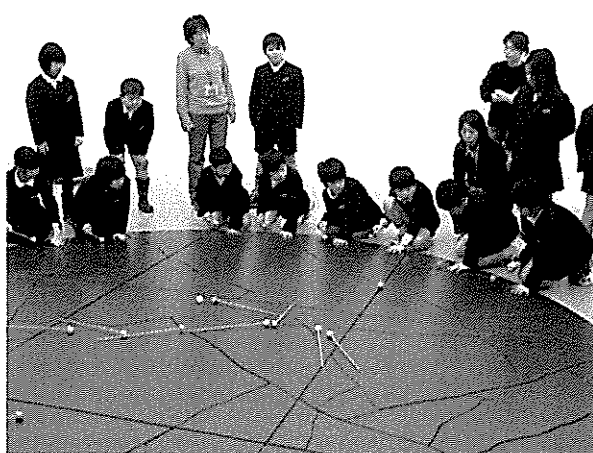
《金沢健一のパフォーマンス模様》



《鉄片から多様な響きを様々な手法で生み出す》



《パフォーマンスを熱心に鑑賞する生徒達》



《手のひらやマレットで音をたててみる》

② それぞれの「音のかけら」づくり 1（構想～制作）：平成 18 年 2 月 17 日 11:00-11:45  
（プロジェクト工房）

4 人一組で 12 班のグループ制作に取り組む。事前に、どんな『音のかけら』を制作するかをグループ毎に話し合い、その構想を円形の紙にドローイングした下絵を持参。それを下に、チョークで実際の鉄板の上に溶断するラインを描いた。パフォーマンス&ワークショップの体験を踏まえ、それぞれが音のイメージを膨らませながら、共同でデザインする作業を真剣に楽しみながら取り組む様子うかがえた。一本の描線を緊張感をもって引く姿が印象的であった。



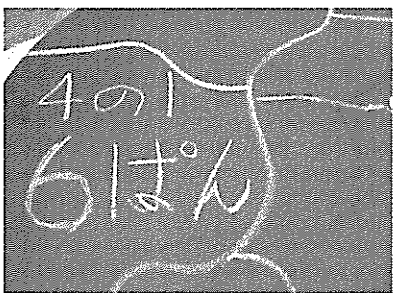
《12 班のグループで共同制作する生徒達》



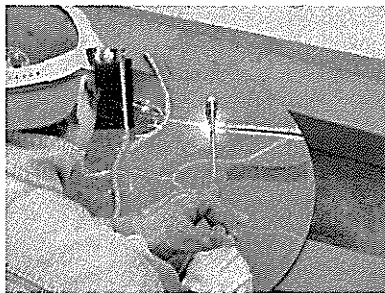
《分割する線をチョークでドローイング》

③ それぞれの「音のかけら」づくり 2（制作）：平成 18 年 3 月 2 日 10:00-11:45（プロジェクト工房）

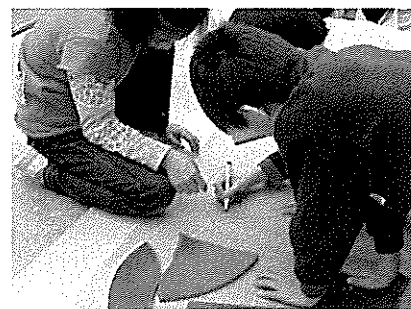
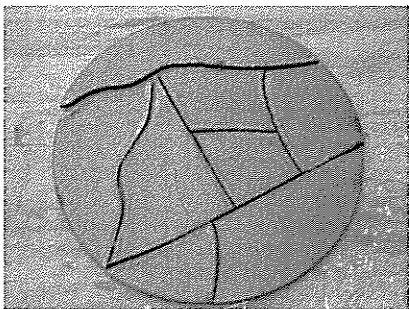
児童たちが描いた線に忠実に沿って、金沢氏が厚さ 9mm の鉄板を溶断する実演をおこなう。自らが引いた線が丁寧に滑らかに切られて行く様子を児童たちは固唾をのんで見守った。希望する児童に金沢氏指導の下「鉄を切る」体験も行った。



《生徒の引いた線に沿って鉄を溶断する金沢氏》



《金沢氏と溶断を体験する生徒達》

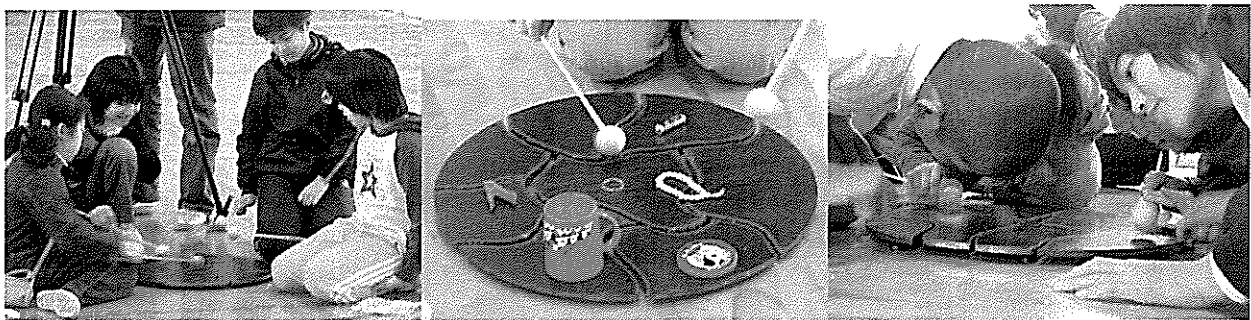


《溶断し、バリをとって磨き上げて完成した『音のかけら』の型紙をとる生徒達》

④「音のかけら」遊ぼう：平成18年3月2日12:00-14:40（長田町小学校、活動室）

美術館でのパフォーマンスから制作ワークショップを経て、完成した作品12点の『音のかけら』を長田町小学校に運び、自分達の作品による音のワークショップ&パフォーマンスを実施。

12作品を部屋全体を使って、円形に並べ、まずは「無音」の状態から指を使って微かな音をたてるところから自由に音を展開させる方法で、各班の音色を循環させる。金沢氏は最小限の声かけによる指示のみで、全てを児童たちの自発的な意欲に委ねる姿勢でワークショップを誘導する。児童たちは、自作の『音のかけら』がどのような響きを立てるかイメージをふくらませながら、小石やビー玉、コップなど身近にあるさまざまな素材のものをもち寄り、実際に響かせてみる。響きの強弱や清濁にかかわらず、どのような音も大切に耳をすまして受け止めようとする姿勢が見受けられた。前回の制作ワークショップでの鉄くずを大切に持ち帰り、作品の上に鉄くずを載せてみる児童もいた。このように、自己表現により感受性が研ぎすまされると同時にその感受性が他者へと開かれていく様子が窺えた。



《完成したそれぞれの『音のかけら』で様々な音色や響きを発見していく生徒達》

（2）地域との連携について

《地元小学校（金沢市長田町小学校）との連携》

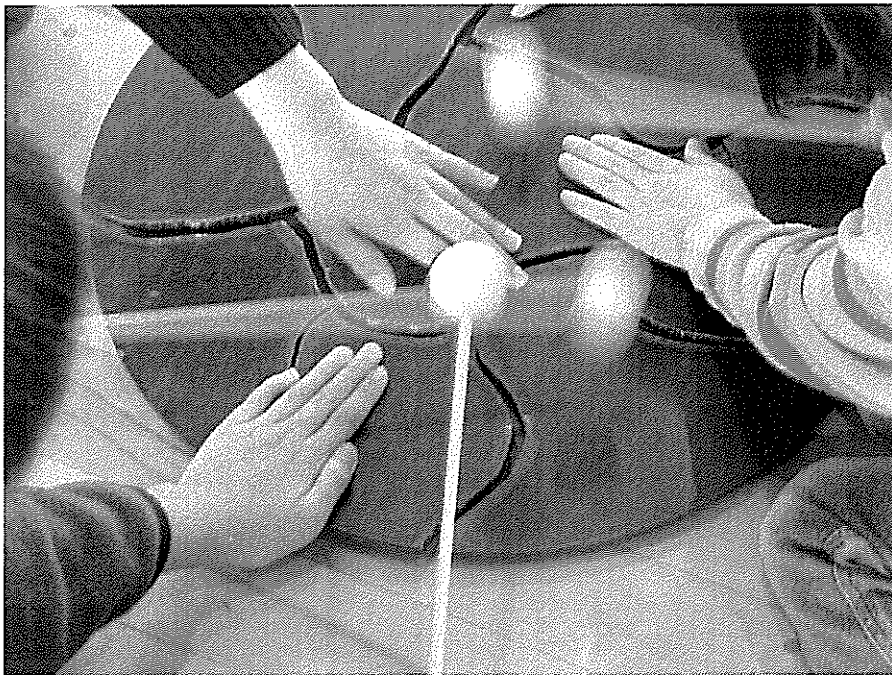
金沢氏、金沢市立長田町小学校の図工教諭、当館学芸員で「音のかけら」ワークショップのスケジュール及び内容を作成。内容の構想において常に留意したのは、美術館と学校が連携して、作家と児童が主役となるワークショップの受け皿を作り、『体験型』の作品『音のかけら』を制作するという根本的な創造体験をトータルにアレンジするというコンセプトである。長田町小学校4年生48人の共同制作による『音のかけら』12点は、作品であると同時に、表現の道具として、音楽、ダンスなど身体表現はもとより様々なパフォーマンスを生み出すものである。

（3）成果物について

《音のかけら》12作品、ワークシート、記録ビデオ

小学生自身が制作した《音のかけら》12点は今後、そのコンセプトとともに『教材』として、学年間、教科間、学校間を縦横無尽に行き来することになる。今回の一連の「音のかけら」ワークショップの模様を捉えたドキュメンタリー映像は、金沢氏と生徒作品との音と造形のワークショップのプロセスを明瞭に示し、ものとしての作品があらたな表現の道具となる可能性をリアルに伝えるメディアとなる。





《自作の「音のかけら」で多様な楽しみ方を自発的に発見していく生徒達》

#### （４）参加者の反応

《作家の反応》：金沢氏は、パフォーマンス&ワークショップを自身の表現スタイルとしている作家であるが、小学校の図工の授業としての取り組みは今回が初めての事例であった。事前の図工担当教諭とのコミュニケーションや、授業時間という枠組みのなかでの内容の組み立てなどによって、ワークショップスタイルに新たな視座をもったという。美術館と学校とが共有する《音のかけら》が、今後いかに機能してゆくか注目したいと、本プロジェクトの趣旨に関して極めて積極的な取り組み姿勢をいただいた。

《生徒の反応》：作品の鑑賞を一方向で行うのではなく、自分たち自身も作者になるというスタンスで、アーティストと出会い、触れ合う体験をもつことは、短時間であっても生徒達にとって極めて充実した体験となったようである。

《先生の反応》：本プロジェクトにおいて、日常とは異なる生徒達の表情や行動が多々みられたことに大きな意義を見いだすとともに、美術館を媒介として作家と直接対話しながら授業を構築していくというプロセスに対して、極めて好意的であり、今後とも継続的にこのような取り組みを授業を核として推進して行きたいとの意欲を示していただいた。

#### （５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

このプロジェクトは、作家と生徒との交流だけでなく、学校による美術館利用や美術館の教室化が促進される契機を創出したと言える。上述したように、「今後は、図工のみならず様々な教科の教育プログラムとしてのプロジェクトも展開してみたい」との学校側からの希望も届いている。今後は、美術館と学校による協力関係を更に強化しながら、美術館における観賞体験と学校の授業との有機的な連携を更に推進していきたい。

## 2. 「ペイント・マイ・ルーム」

### (1) 事業の実施状況について

平成 18 年 2 月 17 日～平成 18 年 3 月 23 日の間、作家西山美なこ氏と金沢市立犀川小学校 3 年生 64 名の交流を中心に「ペイント・マイ・ルーム」プロジェクトを実施した。このプロジェクトは、下記のとおり、大きく 6 つに分けられる。

#### ④ それぞれのあこがれの部屋制作：平成 18 年 2 月 27 日、3 月 6 日（月）、3 月 13 日（月）

犀川小学校生徒ひとりひとりが、「あこがれの部屋」を制作した。ワークシートを用い、まずどのような部屋を制作したいかのスケッチを行い、後に、ティッシュ箱を部屋の枠組みとして用いながら画用紙、毛糸、セロファン、菓子箱等多様な素材を用いて制作を始めた。実際に住んでみたい部屋、存在したら面白い部屋、何十年後に存在しているかもしれない部屋など、現在という時間や「自分」という人称に制約されない多様な展開が見られた。

#### ⑤ 西山氏と生徒の交流：平成 18 年 3 月 14 日（火）

犀川小学校 3 年生は 2 クラスで構成されているが、まず 1 つのクラスが他のクラスや西山氏へそれぞれの作品を発表するという形で始め、1 つのクラスの発表終了後、残りのクラスも同様に発表を行った。その後、西山氏による、画像を用いたプレゼンテーションを実施した。《ザ・ピンクはうす》を中心に、現在までの制作活動や制作上のコンセプトについて発表した。作品に用いる色やモチーフについて、西山氏の個人的思いやその背景にある社会の状況など、生徒に質問をなげかけながら、わかりやすく行っていたと言える。プレゼンテーションの最後には、西山氏が生徒に「みんなも大きい作品を作ってみよう」と呼びかけ、その後、生徒達はグループに分かれ、ワークシートにアイディアを描きとどめた。

#### ⑥ 西山氏《ザ・ピンクはうす》制作（於：金沢 21 世紀美術館）：平成 18 年 3 月 15 日（水）～3 月 19 日（日）

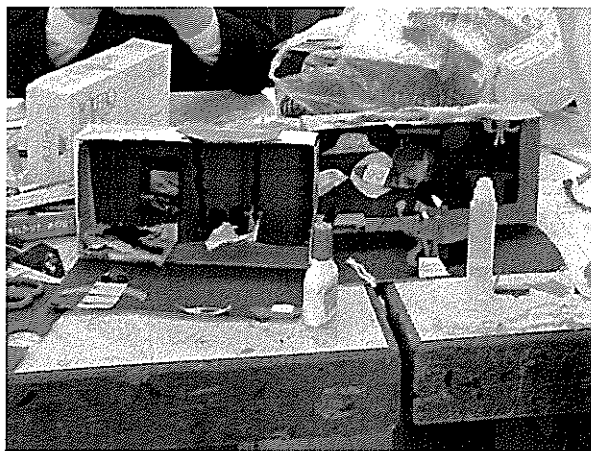
#### ④グループによる「あこがれの部屋」制作：平成 18 年 3 月 16 日（木）、3 月 20 日（月）

犀川小学校 3 年生は、10 グループに分かれ、大きなサイズの「あこがれの部屋」を制作しはじめる。ダンボール、画用紙、ポスターカラー等の素材を用い、ワークシートで描いたアイディアを基に多様な作品を制作しはじめる。3 月 20 日には、西山氏が小学校を訪問し、制作模様を

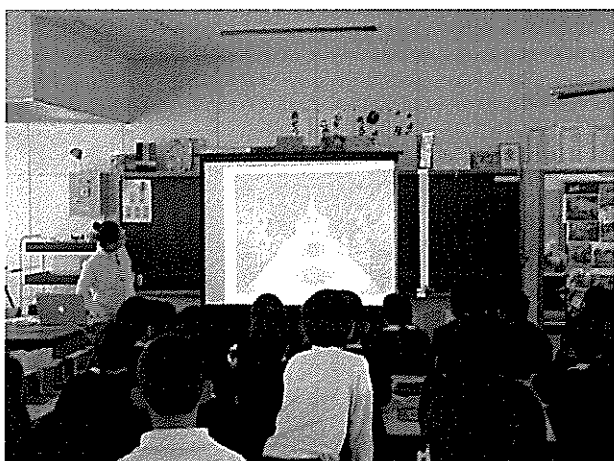
見学し、生徒と交流を行った。



《ひとりひとりの制作風景》



《ひとりひとりの作品》



《西山氏のプレゼンテーション模様》



《西山氏と生徒の交流模様》

⑤犀川小学校3年生、《ザ・ピンクはうす》見学：平成18年3月23日（木）

《ザ・ピンクはうす》の前で、犀川小学校図工教諭主導で授業を行った。「自分（達）の作品と似ている箇所と、違うところを見つけてみよう」という課題の下、まず生徒が自由に作品を観賞した。その後、それぞれの意見を発表し合った。自らの作品制作を踏まえての意見は、西山作品の本質を捉えるものが多かった。見学後生徒達は、西山氏に手紙を書き、まとめて送付した。

⑥犀川小学校3年生「あこがれの部屋」発表：平成18年3月23日

犀川小学校において、グループに分かれて制作した「あこがれの部屋」が一堂に展示された。当館学芸員も共に見学した。それぞれの思いを互いに伝え合いながら、ほとんどが実際に中に入られる作品であったため、それぞれの部屋を訪問し、体験する形で実施された。最後に、西山氏から生徒にあてて制作した「メッセージビデオ」を放映し、プロジェクトは終了をむかえた。





《グループによる制作模様》



《《ザ・ピンクはうす》見学様子》

これら一連のプロジェクトは、記録され平成 18 年 3 月 31 日より館内の数カ所で放映が開始された。参加した作家や生徒だけでなく、一般の観賞者にとっても魅力的な内容となっているため、作品をより身近に感じることや理解の更なる深化が可能となっている。

## （2）地域との連携について

### 《地元小学校（金沢市犀川小学校）との連携》

西山氏、金沢市立犀川小学校の図工教諭、当館学芸員で「ペイント・マイ・ルーム」プロジェクトのスケジュール及び内容を作成。内容において留意したのは、作家及びその世界観と生徒の創造力ができるだけ多く、かつ密接に交流する場を設けることであったが、このために、生徒が制作にとりかかる前のワークシートの作成、作家による生徒へのプレゼンテーションや生徒の制作現場への立ち会い、生徒による西山作品観賞などといった要素を、美術館、学校、作家、3 者共同で事前に計画し、実行した。プロジェクト終了後、当該小学校からは、「今後は、図工のみならず様々な教科の教育プログラムとしてのプロジェクトも展開してみたい」との意見も聞かれた。

## （3）成果物について

### 《記録映像作品》

今回の一連の「ペイント・マイ・ルーム」プロジェクトの模様を捉えたドキュメンタリー映像は、館内の無料ゾーンで放映されている。西山氏と生徒作品との対話の模様などワークショップの内容をリアルに伝え、美術館内の静的な展示作品と美術館の外で起こった動的な出来事をつなぎ、一般の人々に西山氏と生徒たちの交流を広く知らせ、その世界の魅力を感じてもらうことを可能とするものである。この記録映像は、一連のプロジェクトのできるだけ多くの模様を集約し、プロジェクトに参加しなかった観賞者にとっても魅力のある作品となっている。西山氏の展示作品の空間での授業やワークショップ風景そのものが、一般の人々の観賞の対象となることによって、作品を身近に感じ、より深く広い作品理解が生まれると期待できる。



《館内の無料ゾーンで放映中の記録映像作品》

#### （４）参加者の反応

《作家の反応》：西山氏は、小學校生徒との連携プロジェクトに参加したのは今回が初めてであった。生徒ひとりひとりの「マイ・ルーム」だけでなくグループで制作した作品にみるアイディア、色づかいなどに大きな驚きや感動を憶えたと振り返っている。また、生徒は最後に西山氏に手紙を送ったが、この中で、西山氏の作品の本質を鋭く指摘するコメントもあり、西山氏自身にとって刺激的であったと述べている。さらには、今回の一連の交流を、自らの今後の制作活動に活かしたいとしている。

《生徒の反応》：生徒から西山へ宛てたレターを見ると、今回のプロジェクトを「楽しかった」とする声が多く、また自ら制作することへの喜びを発見したと述べる生徒もいた。プロジェクトの最終日（３月２３日）以降も、参加した生徒を美術館で何度も見かけ、美術館へ来館することが身近になったと評価できる。

《先生の反応》：ひとりひとりの「マイ・ルーム」および共同作業で制作した作品にみる創造力を評価すると同時に、作家と生徒が密接に交流を行った今回のプロジェクト自体を評価し、「今後もこのようなプロジェクトを継続的に行いたい」と述べていた。

#### （５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

このプロジェクトは、作家と生徒との交流だけでなく、学校による美術館利用や美術館の教室化が促進される契機を創出したと言える。上述したように、「今後は、図工のみならず様々な教科の教育プログラムとしてのプロジェクトも展開してみたい」との学校側からの希望も届いている。今後は、美術館と学校による協力関係を更に強化しながら、美術館における観賞体験と学校の授業との有機的な連携を更に推進していきたい。